29日　土曜

民数

6:13 これはナジル人についてのおしえである。ナジル人としての聖別の期間が満ちたときは、彼を会見の天幕の入り口に連れて行く。
6:14 彼は次のささげ物を【主】に献げる。すなわち、全焼のささげ物として傷のない一歳の雄の子羊一匹、罪のきよめのささげ物として傷のない一歳の雌の子羊一匹、交わりのいけにえとして傷のない雄羊一匹、
6:15 さらに穀物のささげ物として、種なしパン一かご、油を混ぜた小麦粉の輪形パン、油を塗った種なしの薄焼きパンを、それぞれに添える注ぎのささげ物とともに献げる。
6:16 祭司はこれらのものを【主】の前に近づけ、罪のきよめのささげ物と全焼のささげ物を献げる。
6:17 交わりのいけにえとして雄羊を、一かごの種なしパンとともに【主】に献げ、さらに祭司は穀物のささげ物と注ぎのささげ物を献げる。
6:18 ナジル人は会見の天幕の入り口で、聖別した頭を剃り、その聖別した頭の髪の毛を取って、交わりのいけにえの下にある火にくべる。
6:19 ナジル人がその聖別した髪の毛を剃った後、祭司は煮えた雄羊の肩と、かごの中の種なしの輪形パン一つと、種なしの薄焼きパン一つを取って、ナジル人の手の上に載せる。
6:20 祭司はこれらを奉献物として【主】の前で揺り動かす。これは聖なるものであって、奉献物の胸肉、奉納物のもも肉とともに祭司のものとなる。その後で、このナジル人はぶどう酒を飲むことができる。
6:21 これがナジル人についてのおしえである。ナジル人としての聖別に加えて、その人の力の及ぶ以上に【主】へのささげ物を誓う者は、ナジル人としての聖別のおしえに加えて、その誓った誓いのことばどおりにしなければならない。」
6:22 【主】はモーセにこう告げられた。
6:23 「アロンとその子らに告げよ。『あなたがたはイスラエルの子らに言って、彼らをこのように祝福しなさい。
6:24 【主】があなたを祝福し、あなたを守られますように。
6:25 【主】が御顔をあなたに照らし、あなたを恵まれますように。
6:26 【主】が御顔をあなたに向け、あなたに平安を与えられますように。』
6:27 アロンとその子らが、わたしの名をイスラエルの子らの上に置くなら、わたしが彼らを祝福する。」

ナジル人として自分が聖別されると、この世とは別の霊的存在になったような気持ちになったことでしょう。それは誰にでも時には必要なことで、滅び行くこの世から離れて全く神の領域に入ることは、信仰のすばらしい体験になるのです。
現代でも聖会や弟子訓練など…もちろん礼拝でもそのような信仰の体験を求めることが必要です。ナジル人の条件は必ずしも生活の場を変える必要はありません。つまり日常の中で神に聖別されることができるということです。神を信じない社会に惑わされずに、神の領域に入って信仰体験をしたいとうクリスチャンも多いことでしょう。特別な祈りの期間もすばらしいものです。教会はそのためにも存在しています。
ただし、ナジル人のような特別な期間を全うしたからといって、完全な人になるのではありません。ここでは主へのささげものによって、そのことを教えています。
すなわち動物のささげものは罪の身代わりを表わします。自分自身の罪を認めて、小羊なるイエス様の救いを常に感謝しましょう。また穀物のささげものは謙遜を表わします。霊的な体験をした人は、以前よりも謙遜になるのです。もしも信仰体験を自慢するような言動があれば、その体験は神様によるものではないのかもしれません。自己吟味が必要です。
22節からは祝福の祈りであり、これもまた祝祷と位置づけられます。「アロンとその子らに」祝祷が託されたように、それは神から与えられた特別な権威によって成り立っています。その権威とは民を強いて動かすものではなく、祝福して幸せにするものです。ちょうどイエス様の権威が、人類の救いと永遠の幸いに導くのと同じです。
祭司にこの権威が与えられたのは、祝福による一致が民に実現するためでした。このように教会も一致とは祝福とともにあるのです。礼拝の祝祷も神によって権威が与えられた者により、祝福とともにある一致のためにあります。主は「わたしは彼らを祝福しよう。」と約束なさっていますから、その信仰と理解で祝祷を、週ごとに、しっかりと受けましょう。

①神のみこころは？（信仰のあり方、希望の約束、愛の満たしなど）

②どんな思いになりましたか？（感情や願いなど）

③生き方にどう適用しますか？（あなたのどの部分を主は扱おうとしておられますか）

④この世にあって何を実践しますか？